

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.28 (2015年6月号)◆

まだしばらくは梅雨の季節が続きますが、紫陽花の盛りの頃、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。『Intelligence』15号がようやく刊行されました。ぜひ皆様のご感想ご意見をうかがわせていただければ幸いです。20世紀メディア研究会は6月27日、7月25日に開催予定ですので、こちらにもご出席賜れば幸いです。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧ください。このたび、会員向けブログも開始いたしました。どうぞご笑覧ください。今後とも会員向けの情報発信に努めてまいります。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第93回20世紀メディア研究会】(5月30日(土)午後2時半～5時半)早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館 808号室

・玉楽 (東京大学大学院学際情報学府・博士後期課程1年)

「満洲映画における政治宣伝—農村部の巡回映写活動を中心に—」は修士論文の成果から、満洲国における映画巡回網の形成と、文化映画における国策宣伝表象の分析について報告されました。

・福岡大祐 (早稲田大学大学院文学研究科研究生)

「追放された「スパイ」— 第一次世界大戦期における独逸人強制追放と谷崎潤一郎「独探」を手がかりに」は、第一次世界大戦時の日本に生じた排外的な言説環境を、ドイツ人オーストリア人の強制追放事件を通じて検討するというこころみで、谷崎潤一郎「独探」を同時代ドキュメントとして再読していただきました。

・井上理恵 (桐朋学園芸術短期大学特任教授)

「菊田一夫と占領期の仕事--NHKの連続ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」」は、戦災孤児・浮浪児のための番組制作をCIEに指示されたNHKの手掛けた菊田一夫「鐘の鳴る丘」の成り立ちについて報告していただきました。

・なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、6月27日(土)で、曲揚さん、河野通之さん、河合隆史さんをご報告の予定です。その後は、7月25日(土)、9月26日(土)を予定しております。なお、NPO インテリジェンス研究所による諜報研究会は7月11日(土)に開催予定です。また、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

日比嘉高『いま、大学で何が起きているのか』(ひつじ書房)。著者は本研究会でもご報告いただいたことのある日本文学研究者で名古屋大学教員。財界や政府からの大学運営に対する要求は、市場原理主義の発想を大学に適用し、極めて短期間のうちに成果を求め、人文社会系(教育学等も含む、いわゆる文系)の学知を大学に不要なものとみなし定員削減を指示するというもので、少なからぬ大学人に衝撃を与えている。それは大学が持ってきたはずの知的な活動拠点としての役目を殺してしまい、ひいては多様な創造の芽を育くむという重要な機能を破壊することではないのか、というのが著者の問題提起である。2001年の文部省と科学技術庁の統合以来、企業や社会に直接、あるいはすぐに、役に立たない大学はいらないという論理があからさまになってきた。その意味で大学の21世紀は、文字通り反知性主義に支配されようとしている。だが、人文科学の知は(社会科学の知も)、諸学を媒介し、融合し、横断し再編する際になくしてはならないものであり、それを欠いて、新時代の知の布置やパラダイムを描くことはできまい。学際的国際的共同研究の基本でもある。国際水準に照らしても人文科学の知を持たない大学など、職業訓練学校か専門学校でしかないはずだが、どうやらこのままでは日本の圧倒的多数の大学は海外出稼ぎができ

そんな労働者を育成すれば事足りるということになりそうである。いわゆる文系の研究において、公正な競争や評価、顕彰がなされてきたかという問題はまた別にあるけれど、質的な向上や研究者の国際的な競争力を求めるための方策を立てずに、例えば国立大学文系の定員を半減させるという計画で、いったい何がもたらされるのか。理系の教育力、国際的競争力にとっても好ましい変化が起きるとはおもわれない。

[6月21日付文責：川崎賢子]